

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(A)

研究期間：2007～2010

課題番号：19203001

研究課題名(和文) 裁判員制度の人々の受容と望ましい制度運用について  
—裁判員制度は成功するか?—

研究課題名(英文)

How is the lay judge system accepted by the Japanese and how should it be operated?

研究代表者

松村 良之 (MATSUMURA YOSHIYUKI)

千葉大学・大学院人文社会科学研究所・教授

研究者番号：80091502

研究成果の概要(和文)：

本研究では2回の一般人を対象とする裁判員制度と刑事司法に関する質問票調査を行った。主な知見は、(1)被告人、被疑者に対して一般的に厳しい態度を取っている。(2)裁判員裁判については、わかりやすさ、民主主義という観点からは高く評価しているが、真実発見という観点からは評価は低い。(3)裁判員になる意欲は全般的には高くはない。(4)第1波調査と第2波調査の比較では、全般的に裁判員制度への肯定的評価が高まっている。

研究成果の概要(英文)：

Our research project conducted two questionnaire surveys among ordinary people in Japan, in order to research the Japanese attitudes toward criminal justice and those toward the lay judge system.

The knowledge we acquired from these surveys is as follows. (1) Ordinary people generally take severer attitudes toward suspects or defendants. (2) They highly evaluate the lay judge system with respect to understandability and democracy, while the evaluation of finding the truth is rather negative. (3) They are not very willing to serve as lay judge in general, however, the self-directive people with higher educational background and high-income, who are less dependent on the others or the government, are more willing. (4) Positive evaluations of the lay judge system were observed more in the second survey than the first survey.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	14,600,000	4,380,000	18,980,000
2008年度	5,000,000	1,500,000	6,500,000
2009年度	8,100,000	2,430,000	10,530,000
2010年度	11,300,000	3,390,000	14,690,000
年度			
総計	39,000,000	11,700,000	50,700,000

研究分野：法社会学、法心理学

科研費の分科・細目：法学・基礎法学

キーワード：基礎法学、刑事法学、裁判員、陪審員、法意識、刑事司法、量刑、事実認定

## 1. 研究開始当初の背景

2008年5月に裁判員制度が始まることとなった。これは司法への国民参加という

法制度の大改革であり、このような改革を国民が受け入れ、裁判員制度が定着していくかどうかは、政策的に重要な課題である。さら

に、それにもまして、理論的には、人々が新しい法制度にいかにか適応していくのかあるいはいかにないのかという問題であり、法社会学の観点から重要な研究課題である。

## 2. 研究の目的

裁判員制度導入前と導入後でひとびとの裁判員制度と刑事司法に対する意識（社会心理学の用語を用いれば態度）がどう変化したかを明らかにする。さらに、弁護士の裁判員制度と刑事司法に対する意識も明らかにする。

## 3. 研究の方法

本研究では2回の一般人を対象とする裁判員制度と刑事司法に関する質問票調査（第1波：2008年2月、サンプル数1,800、有効回答数1,150、第2波：2011年2月、サンプル数1,600、有効回答数1,109）を行った。質問項目の大部分は共通である。質問項目は、裁判所・警察に対する信頼、刑事被告人の権利保障、厳罰主義、死刑、刑罰の目的、弁護士の評価、裁判員になる意欲とその障害などからなる。

また、本研究ではさらに、郵送調査法を用いて、裁判員裁判と刑事司法に対する、弁護士の態度（一般人との比較、一般人の態度についてのメタ認知を含む）、裁判員裁判についての意欲、刑事弁護の経験などを尋ねた（東京3会からランダムサンプル1500、京都弁護士会と札幌を除く北海道3会は悉皆、回収率は、それぞれ48%、37%、58%）。

## 4. 研究成果

主な知見は、一般人調査については、(1)被告人、被疑者に対して一般的に厳しい態度を取っている。(2)裁判員裁判については、わかりやすさ、民主主義という観点からは高く評価しているが、真実発見という観点からは評価は低い。(3)裁判員になる意欲は全般的には高くはない。その中では、自律的（他者へ政府への依存が低い）で、高学歴、高収入の人々が意欲が高い。(4)第1波調査と第2波調査の比較では、全般的に裁判員制度への肯定的評価が高まっている。一般人の厳罰主義的な態度は、高まりも低まりもしていない。

弁護士調査については、結果は、多くの設問において、弁護士の間での態度の相違は大きく、また弁護士会による違いも非常に大きい。そして、それは、年齢、弁護士の経験年数、性別、事務所規模など事務所の態様とは関係がなく、弁護士会文化とも言うべきものが影響していると考えられる。

さらに、本研究では、法曹三者合同模擬裁判における評議の資料を基に、言語学、語用論、談話分析、説得研究、集団意思決定論と

いった分野の知見を利用しながら、裁判参加者の言語使用の特徴を質的・量的に検討・抽出し、そこから裁判員と裁判官の判断要因、意識、思考体系の差異などを明らかにした。そして、よりよき裁判員制度という観点から発話量のコントロール、および影響的発話の回避の方法についていくつかの提言を行った。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計9件）

①松村良之、太田勝造、木下麻奈子、山田裕子、裁判員制度と刑事司法に対する弁護士の意識、北大法学論集、査読無、61巻1号、2010、498-540

②堀田秀吾、レジスターから見た裁判官と裁判員の思考体系の差異、法社会学、査読有、72巻、2010、79-91

③堀田秀吾、藤田政博、模擬裁判員裁判の評議における発話量の統計的分析、統計数理研究所共同研究レポート（裁判員裁判における言語使用に関する統計を用いた研究）、査読無、237、2010、1-18

④堀田秀吾、藤田政博、橋内武、首藤佐智子、発話行為からみた評議参加者の参加態度に関する分析、統計数理研究所共同研究レポート（裁判員裁判における言語使用に関する統計を用いた研究）、査読無、237、2010、21-39

⑤藤田政博、日本社会にとっての裁判員制度—日本の陪審制度を参考に—、法社会学、査読有、72、2010、183-192

⑥ Fujita, Masahiro, Verdict-driven, evidence-driven, and “issue-driven”: A proposition of deliberation style particularly found in mixed-jury type deliberations like “Saiban-in seido”, Journal of the Japan-Netherlands Institute, 査読無、10、22-34

⑦松村良之、人々の裁判員制度と刑事司法への態度——その評価を中心に——、法社会学、査読有、72巻、2010、70-87

⑧太田勝造、裁判員裁判の実証的研究：要因計画による制度運用への示唆、法社会学、査読有、72巻、2010、88-116

⑨木下麻奈子、人々の裁判員裁判への態度—裁判員になることを規定する要因の構造—、法社会学、査読有、72巻、2010、117-134

〔学会発表〕（計15件）

①Daniel H. Foote, “Japanese Criminal Justice Reform in Historical Perspective,” 2011 Sho Sato Conference on Japanese Law: The Japanese Legal System:

An Era of Transition、University of California, Berkeley、March 14, 2011、Berkeley, California, USA (招待講演)

②太田勝造、日本法社会学会 2010 年度学術大会、弁護士特性と弁護士の法意識・裁判員制度への態度、2010 年 5 月 8 日、同志社大学

③太田勝造、"Saiban-in Seido of Japan: People's Expectation and Evaluation," Lecture at Columbia Law School、March 2, 2011、New York, NY, USA

④木下麻奈子、日本法社会学会学術大会、弁護士の裁判員制度への意欲の構造、2010 年 5 月 8 日、同志社大学

⑤堀田秀吾、「司法コミュニケーションにおける法と言語の接点の模索」ワークショップ「ことばと社会：心理学的アプローチの可能性と問題点」、日本心理学会、2010 年 9 月 20 日、大阪大学

⑥堀田秀吾、『特別セッション： テキストマイニングによる特徴の分析』日本行動計量学会、裁判員裁判における立場の違いとテキストマイニング、2010 年 9 月 25 日、埼玉大学

⑦Fujita, Masahiro, & Okada, Yoshinori、The effect of presentation of victim on sentencing: Judgment of potential jurors. Poster session presented in The 2011 International Conference for AP-LS, the European Association of Psychology and Law, and the Australian and New Zealand Association of Psychiatry, Psychology and Law, held at Hyatt Regency Miami, Miami, Florida, USA, March 5, 2011

⑧Okada, Yoshinori, & Fujita, Masahiro、Lay participation in Japanese criminal court and change of citizen's recognition. Poster session presented in The 2011 International Conference for AP-LS, the European Association of Psychology and Law, and the Australian and New Zealand Association of Psychiatry, Psychology and Law, held at Hyatt Regency Miami, Miami, Florida, USA, March 5, 2011

⑨Hotta, Syugo, & Fujita, Masahiro. Where linguistics, psychology, and law meet: Analyzing communication between lay and professional judges. Paper presented in the 13th Biennial Meeting of International Society for Justice Research, held at Banff Centre, Banff, Alberta, Canada, August 23.

⑩Fujita, Masahiro, & Hotta, Syugo. The effect of amount of information and power on mixed jury deliberation: Do professional judges always call the shots? Paper presented in the 2010 Annual Meeting of Law and Society Association, held at

Renaissance Hotel, Chicago, Illinois, USA, May 27.

⑪Hotta, Syugo, & Fujita, Masahiro、Let the deliberation corpora speak about lay participation in criminal trials in Japan. Paper presented in the 2010 Annual Meeting of Law and Society Association, held at Renaissance Hotel, Chicago, Illinois, USA, May 27.

⑫藤田政博、権威主義的パーソナリティと司法参加：司法への態度とF 尺度およびRWAとの関連の検討、ポスターセッション、日本心理学会第 74 回大会、大阪大学豊中キャンパス(大阪府豊中市)、2010 年 9 月 20 日

⑬堀田秀吾、藤田政博、裁判員評議とコミュニケーション、ワークショップ報告(司法過程におけるコミュニケーション：分析の有用性とその課題)、法と心理学会第 10 回大会、2009 年 10 月 24 日、國學院大學渋谷キャンパス

⑭Syugo Hotta and Junsaku Nakamura、A Corpus Study of Lay-Professional Communication in Criminal Courts, Corpus Linguistics Conference 2009、2009 年 7 月 22 日、University of Liverpool, UK.

⑮堀田秀吾、橋内武、藤田政博、模擬評議に見られる制度的談話-発話の力の定量分析モデルによる分析、日本語用論学会、2007 年 12 月 8 日、桃山学院大学

〔図書〕(計 2 件)

①堀田秀吾、ひつじ書房、法コンテキストの言語理論、2010、256

②ダニエル・H・フット、NTT出版、名もない顔もない司法：日本の裁判は変わるのか、2007、356

〔その他〕

ホームページ等

[http://www1.doshisha.ac.jp/~mkinoshi/pr\\_o\\_a.html](http://www1.doshisha.ac.jp/~mkinoshi/pr_o_a.html)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

松村 良之 (MATSUMURA YOSHIYUKI)

千葉大学・大学院人文社会科学研究所・教授

研究者番号：80091502

### (2) 研究分担者

野口 裕之 (NOGUCHI HIROYUKI)

名古屋大学・大学院教育発達科学研究科・教授

研究者番号：60114815

白取 祐司 (SHIRATORI YUJI)

北海道大学・大学院法学研究科・教授

研究者番号：10171050

D・H フット (Daniel Harrington Foote)  
東京大学・大学院法学政治学研究科・教授  
研究者番号：10323619

太田 勝造 (OTA SHOZO)  
東京大学・大学院法学政治学研究科・教授  
研究者番号：40152136

木下 麻奈子 (KINOSHITA MANAKO)  
同志社大学・法学部・教授  
研究者番号：00281171

堀田 秀吾 (HOTTA SYUGO)  
明治大学・法学部・教授  
研究者番号：70330008

藤田 政博 (FUJITA MASAHIRO)  
関西大学・社会学部・准教授  
研究者番号：60377140

山田 裕子 (YAMADA YUKO)  
北海道大学・大学院法学研究科附属高等法  
政教育研究センター・協力研究員  
研究者番号：10360885

村山 眞雄 (MURAYAMA MASAYUKI)  
明治大学・法学部・教授  
研究者番号：30157804